

# 銘木市に見られる北海道産広葉樹材

## (3) マカバ・メジロカバ

道総研林産試験場 佐藤 真由美



終活中の女性から、愛用してきた机天板の樹種を確認したいとの相談があり、幅45cm、厚さ4cmの重厚な板が届けられました。目立たないように小片を切り取り、顕微鏡観察でカバノキ属と判定しました。木口の年輪の曲率を基に直径60cm以上の原木から得られたと推定し、概算の材密度と色味に加え、富良野地域で屋外作業に使われていた長さ数メートルの板から切り分けられたとの情報から、ウダイカンバの材と判断しました。北海道産広葉樹の花形とも言えるマカバです（本稿では、木材の流通名として「マカバ」「メジロカバ」、樹木の標準和名として「ウダイカンバ」と使い分けます）。原木立米単価数十万円も珍しくないマカバの長尺材が、屋外で土木用具の敷板になっていたことにも驚きますが、その木材がヘビーデューティに耐える強度を持つことが知られていた証とも言えます。

北海道産銘木には、この地に進出してきた和人が和 문화で賞用されてきた樹種に似た木材を見出し、代用品として使い始めたと考えられるものがあり、マカバも「カバザクラ」という紛らわしい商品名で売られました。お花見を楽しむほうのサクラにも「蒲桜（カバザクラ）」という品種があり、木の名前にはしばしば混乱させられます。数百年を生きたウダイカンバの心材は、渋好みの日本人が珍重したヤマザクラ材に似て色が濃く、ち密な散孔材（木口面で見られる道管が年輪内で一様に分布する広葉樹材）であることも共通します。また、光沢のある外樹皮が地面に対し水平方向に剥がれる特徴も似ています。とは言え、ウダイカンバはカバノキ科カバノキ属、ヤマザクラはバラ科サクラ属の樹木で、全くの別物です。北海道には、本州のヤマザクラと同属のエゾヤマザクラが自生し、この木材も「サクラ」の名で銘木市に出品されますが、マカバに比べるとサクラの原木は細く、数量も少ない、かといって貴重材とも言い難い、微妙な立場になっています。幅広の材が取れる大径材の強みもあってマカバが評判を呼び、代替材から逆転したと思われる。

北海道産広葉樹の中でもタモやナラなどは外国産の代替樹種があり、利用可能な資源が希少となっている道産材を補填していますが、マカバを代替できる外国

産樹種はありません。色合いとしては北米産ブラックチェリー（サクラの仲間です）に近いとも言えませんが、チェリー材は華やかなオレンジ色味が強いのに対し、マカバは落ち着いた紫味を帯び、きめ細やかで艶のある質感は置き換えがたい風情を持っています。

例年1月、年間で最も盛り上がる旭川銘木市初市の目玉は、東京大学北海道演習林から出品されるマカバです（写真1）。ウダイカンバは、道内ではちょっと山道に入るとよく見かける決して珍しくない樹種ですが、これが数百年の樹齢を経て立派な心材ができる、マカバと呼ばれて珍重されます。心材が占める割合が大きく（直径比率で概ね85%以上）、その色が均一に濃いほど価値が高くなります。マカバになる前のウダイカンバ、あるいはマカバにならなかったウダイカンバはメジロカバ（写真2）と呼ばれます。筆者の手元にある資料で最も古い1989年9月の銘木市では、夏場の数字なので単純に比較はできませんが、マカバの出品が材積比で全体の7%に対しメジロカバは0.2%だったものが、昨2020年の9月には、マカバは0.4%に対しメジロカバが7.9%と、完全に入れ替わっています。マカバの出品が多い1月でも、直近の2021年初市では、マカバ2.2%に対し、メジロカバは13.6%と、全体の4割を占めるナラに次いでメジロカバの出品が多くなっています。ウダイカンバは山火事跡地などに一斉林を作ったり、明るいカラマツ植栽地に侵入し、いつの間にか混交林になっていたりします。近年の針葉樹人工林管理を中心とした施業の中から、そう



写真1 東京大学演習林産のマカバ（2021年1月）



写真2 メジロカバ (2021年1月)



写真3 東京大学演習林のウダイカンバ(2012年9月)

いった経歴を持つ若いウダイカンバ，すなわちメジロカバが銘木市に送り出されていると考えられます。

前段で述べたように，マカバと言えば東大演習林が有名です。同演習林は，国内の大学演習林として単独では最大の面積を擁し，広大な天然林を抱えています。大学職員の案内で林道を走って行くと，林内のところどころに見るからに太いウダイカンバが垣間見られます(写真3)。ここでは，大径木を数百本リストアップして管理しているそうです。その冬に伐採予定の1本を見上げると・・・「キノコが出てますよ!」「な～に，赤身(心材)は大丈夫だから(余裕の笑い)」。マカバは，腐朽菌に侵されにくい心材の価値が高く，しかも，立ち枯れてからのほうが材色が良くなるとも言われています。長年にわたり観察を続けられるのも大学演習林ならではのですが，木材としての価値が高まる伐り時を待ち，見極める大学職員の経験・技術には頭が下がります。

しかし，太いウダイカンバなら中身はマカバなのかと言えば，そうとは限らないのが難しいところです。伐る前にマカバかどうかを知る方法はないのかと，以前から調べられて来ましたが<sup>1,2)</sup>，確実な決め手は発表されていません。遺伝的な形質，生育環境などの研究から，立派な心材ができる条件が解明できれば，マカバになる種苗や育成法も開発できそうですが，大学職員からは「マカバが大量に作られて，価格が下がるのも困る」と言われてしまいました。学問上の動機だけでは済まない問題もあるようです。いずれにせよ，そういった研究成果が業界に反映されるのは数百年後になるのかも知れません。

さて，ウダイカンバの植栽地が道内ところどころに

見られます。しかし，ウダイカンバの育林は，なかなか難しく，苗はウサギに食べられ，害虫に葉を食べられ，断念する林業家は少なくないようです。また，ウダイカンバは隣の木と枝が触れると，成長が鈍るようです<sup>3)</sup>。植栽密度を低く抑えるのは量的にはデメリットですし，除間伐に要する人手，コストも課題となりますが，量より質で高価値を得られるなら，ひとつの方向性です。林産試験場では，人工林と二次林のウダイカンバの材質試験も手がけました<sup>4)</sup>。樹齢100年に満たないウダイカンバは，当然の如く，心材率が直径比50%にも満たないメジロカバです。それらの各種材質は，天然林材を基準とした既知の値の範囲に収まります。

メジロカバでも素性の良い原木は，案外高値で買われていきます。メジロカバの心材は真円形のものが多く，ロータリー単板などに「白いカバ材」を求める業者だけでなく，製材業者もマカバより安価なメジロカバに注目します。色合いが違うだけで，木材の基本的な性質は変わらない上に，元々の材色が淡ければ，塗装で望みどおりに揃えることができるので，大きなメリットとなります。昔は嫌がられた「源平(心辺材が入って2色になっている材)」も，最近の若いユーザーはあまり気にしないようです。

#### ■参考文献

- 1) 清水一：光珠内季報，105，pp. 1-5 (1996)。
- 2) 田中京子，長坂壽俊，松崎智徳：森林総合研究所 北海道支所研究レポート，36，pp. 1-2 (1996)。
- 3) 大野泰之：光珠内季報，129，pp. 6-10 (2003)。
- 4) 大崎久司：林産試験場報，543，pp. 18-28(2016)。